

編集後記

- ◇ 2011年は年初から、日本海側を中心とする豪雪、52年ぶりの霧島連山・新燃岳の大噴火、3月11日の東北関東大震災の発生、全国的な鳥インフルエンザの蔓延など、大規模な自然災害等の頻発が目立つ。

新燃岳が噴火した翌々日の1月28日、かんしょ品質評価研究会が、(独)農研機構・都城研究拠点で開催された。しかし、同研究会主催者のいも類振興会をはじめ、東京の関係者は、残念ながら降灰による航空機欠航のため出席できなかった。続発するこれらの想像を絶する規模の自然災害が一日も早く終息するようお願い、被害の回復を待ちたい。

- ◇ 今、どの公益法人を問わず「冬の時代」を迎えている。勿論、財団法人いも類振興会もその例外ではない。

いも類振興会の評議員会・理事会は3月25日に開催され、平成23年度の事業計画、収支予算書が承認された。これまで受けてきた補助金は平成22年度で打切られ、予算、事業規模とも大幅な縮小を余儀なくされた。少ない予算を有効に活用し、2012年3月には「ジャガイモ事典」の刊行を目指すなど、いも類の振興に些かなりとも寄与したい。

- ◇ 本誌の特集1では、当初編集計画になかった「地球温暖化と平成22年産いも類の生産」を、急遽取り上げた。

平成22年夏から秋にかけての猛暑は、サツマイモ、ジャガイモの生産においても、予想を超える減収、品質低下を招いた。この事態を看過できないとみなし、農水省、北海道、茨城県の関係者に、本テーマに関する執筆をお願いした。地球温暖化現象に対する今後のサツマイモ、ジャガイモへの生産対応は、一つずつ地道に地域毎の経験則を記録・分析し、それらを積み重ね解決していくことが基本であると理解している。今回の特集も、その一歩になれば幸いだ。

- ◇ 特集2では、「サツマイモ色素利用の現状と将来」をテーマに編集した。

今から16年前の平成7年に、最初の高アントシアニン加工用品種「アヤムラサキ」が育成された。この品種は、色素抽出、ジュースなどに利用されてきた。それ以降、色素加工用のサツマイモ新品種が育成され加工技術の進歩もあり、その色素を利用した加工製品は一定の需要を生み出している。

今回の特集では、サツマイモ色素の基礎知識をはじめ、その現状と課題、将来の方向について、各分野の専門家に解説をいただいた。自然素材であるサツマイモ色素の有効活用が、将来、一層進むことを期待したい。

(狩谷 昭男)

いも類振興情報 第107号

2011(平成23)年4月15日発行

発行 財団法人 いも類振興会

〒107-0052 東京都港区赤坂6-10-41 ヴィップ赤坂303

TEL 03-3588-1040 FAX 03-3588-1225

E-mail: imoshin@fancy.ocn.ne.jp

振替 00130-1-110152

印刷 株式会社丸井工文社